

◆東京ニューシティ管弦楽団

第66回定期演奏会

ニューイヤール・コンサート2010として行われた。前半にモーツァルト「魔笛」序曲とショパンのピアノ協奏曲第一番(ピアノ加藤大樹)、後半はソプラノの安井陽子を迎えて

ウィーン音楽という構成だ。

「魔笛」序曲の序奏、ピリオド奏法を採り入れたショパンなど、今回も指揮者・内藤彰とオーケストラの創意と意気込みがよく伝わってくる。清新な音楽づくりだ。独奏の加藤はいかにもショパンの若書きらしい爽

やかな叙情をおおらかに歌いあげて好演。曲の背後に潜む憂愁の陰翳までの表現に立ち至るのは無理なのかも。しれないが、立派な演奏ではあった。シュトラウスの「春の声」、「南国のばら」。「美しく青きドナウ」などはヴィヴァーートを交えた折衷の奏法との

こと。安井の華やかな歌唱は、まさに初春に相応しい楽しい聴きものだった。「アンネン・ポルカ」、レハール「金と銀」のたゆとうリズムの妙が、ウィーンの香りを体現していた。良かった。(1月9日、北とぴあ・さくらホール)

(保延裕史)